
平和のコバナシたち

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和のコバナシたち

【Nコード】

N2385I

【作者名】

来実

【あらすじ】

平次と和葉の小噺集のつもりです。

痴話ケンカ編

「平次のどあほ！」

「誰があほやねんボケ！」

教室で繰り広げられる
痴話喧嘩を
クラスメートは呆れながらも
楽しげに観戦(?)する。

「あんたがあたしのドラ焼き食べるからわるいんや！」

「うちの冷蔵庫にあるん俺が食ってなにが悪いねん！」

「あたし専用のスペースにいれといたやろっ！！！」

「んなもん知らんわっ！」

こいつらはなんなんだ、
とクラスメートは思う。

「なんで服部家の冷蔵庫に遠山のスペースがあるねん」

誰かのつぶやきに周りの人間がウンウンと頷く。

「……はあ！？俺のジャージ汚したんお前かい！」

「仕方ないやん！おばちゃんの手伝いしとったら醤油かかってしも
たんや！」

「俺の服勝手に着るなや！」

「せやかてあたしの部屋にあつたんやもんっ！あたしの自由やろ！」

「勝手に自分の部屋にすんなや！飯やろ、飯！」

「おばちゃんが、ここ和葉ちゃんの部屋や言うつとったもん」

「あのオバハンろくなこと言わへんなあ」

「おばちゃんのこと悪く言わんといて！」

クラスメートはまたため息をつく。

「…なんで服部家に遠山の部屋があんねん」

「…うちの風呂場に甘ったるいシャンプー置いたんお前やる!」

「いい香りやん!それにもとからあるシャンプーかて置いてあるやろ?」

「せやけどなあ!こないだ夜中に風呂入って、うつかりそのシャンプー使ってもーて、えらい髪が甘ったるい匂いしよってからに…さんざんやったで!」

「ええやん!」

「男からあんな匂いしたら気色悪いやろ!」

「確かに平次から香ったら気色悪いかも…」

「納得すんなや！」

「どつちやねん！」

「…なんで服部家に遠山専用のシャンプーが置いてあるねん」

「ってことは服部はいつも遠山の風呂上がり姿をみとるんか？」

「……あとでリンチやな（笑）」

今日もふたりの痴話喧嘩は止まらない。

Fin .

シリーズ編

今は、5時間目のおわり。
幼なじみのアイツは
事件で3日前から学校に
きていない。

いつもの事なので、
和葉は特に気にしないで
友達と談話していた。
もちろん、
早く帰ってこんかな…
とは思っているが。

ガラッ

いきなり
教室のドアが開く。

そこには、アイツ。

「服部久しぶりやないか」「事件終わったんか？」

クラスメートが話しかけるのに

まるで聞こえていない

かのように無表情。

返事をする事もなく、

通りすぎた。

そして、

どういう風のふきまわしか珍しく真っ先に
あたしのところにきた。

「…おかえり平次。どないしたん？」

平次はあたしの問いに

答える事なく…

ぼす。

「…えっ？」

無言で、あたしの肩に
顔を埋める平次。
いつもと違う平次に
クラスメートの視線が集まる。

ふと気づいた。
あたしにしか
わからないだろう
平次の体の震え。

いつもならあたしは
照れ隠しで騒ぐけど
とてもそんな事ができる
状況じゃない。

普段より小さく感じる
平次の背中に手を回して
優しく包んだ。

クラスメートは、
平次がどうしてこうなのかわからないと思う。
でも、あたしにはわかる。

「…平次は間違えてへんよ」

ぴくつと平次が動いたのが見てとれた。

「平次は正しい事しとんねん。例え真実がどうしても、アンタは間違
こつてへんよ…」

「かずは…」

「…おかえり平次」

「…おおきに」

クラスメートは、ふたりの
心のつながりを
まざまざと見せられた
気がした。

誰よりも

わかりあっている...と。

こんなふたりが

別の意味で心通わせるのはもう少しあとの話——

ラブラブ(?) 編

キンコーン…

ダダダダッ

ガラッ

「ギリギリセーフや!」

「よかったあ…。アンタもうちよい早く起きてや!」
「間に合ったんやからええやんけ」

「また仲良くふたりで登校か服部!」
「うっさいわ!だまっとき!」

「さすが夫婦!ラブラブやね」

「ただの幼なじみやって言ってるやんっ」

いつものように一通りからかわれた後二人はそれぞれの席についた。そんなふたりをじっと見つめる奴らがいることに、二人は気付いていない。

##

「お弁当たべよ和葉！」

「うん！…あ。うち古典の教科書忘れたんやった！借りてくるわ！」

「あ！あたしもや！待って和葉！」

そして。

ふたりが消えた場所に現れたのは、一部の男子。

「服部いないな？」

「大丈夫や。」

「よっしゃ、やるで」

なんとこいつらは、和葉の水筒にアルコール度数の高い酒を混ぜたのだ！

「遠山、へろへろになったら可愛ええやろなあ」

「へへへ」

そう。こいつらは、クラス1可愛い和葉の酔った姿を見たいがためにこんなことをした、いわゆる和葉の隠れファンである。

###

「借りれてよかったあ！さ、食べよ和葉」

「せやねー！」

… 10分後

「み〜なあ ふわふわすんでえ〜」

「か、和葉！？さつきからアンタどないしたん！？」

「なーんもせえへんよ」

「うそつけっ！服部君、ちょっと来て！」

この時、当然ながら例の男子たちはにやけていた。

「思ったとおり可愛え〜」「めっちゃ無防備やし！」「目エとろんとしとる〜」

このあとこの和葉ファンたちは、啞然とするはめになるのだが。

「どうしたん本田。」

「和葉が変なん！」

「あ〜へーじゃあ」

「和葉？どないしたん？」

「へーいじゅ」

きゅっ

「か、和葉…！？」

なんと和葉が、平次に抱き着いたのである。

「…さ、酒臭いでお前」

「そんな事ないでえ」

「……………」

（あかん、こいつ酔っ取る）

「お前、なんで酒弱いくせして飲んだんや！しかも学校やで！？このあほ！」

「……………」

「和葉…？」

「うち、あほ…？」

「…っ／＼／」

（やばい…可愛ええ…！とろんとしとる目で上目遣いすんなや…）

その時、平次はにやけている集団に気づいた。

「…お前らっ！なんかしたんか！？」

「し、してないで！」

「そや！水筒なんか触ってへん！」

「……しまった…」

「お前らあ！」

平次がしばきに行こうとしたその時。

「へーいじゅ」

「…あん？」

ちゅっ

「……………／／／」

クラス中が啞然とした。

「…か、和葉…！何さらす……………」

こてん。

「……っっ」

和葉は、平次に寄り掛かって眠ってしまった。

「「と、遠山の寝顔かわええ〜!!!!」」

クラス中の男子が沸き上がったのは言うまでもない。

「なあ……」

「ん？」

「結局今回一番いい思いしたん服部やないか？」

「…せやな…」

「俺ら何しとんのやろ…」

結局、平次の服を掴んだままどんなに声をかけても起きなかった和葉は、午後の授業の間ずっと…

平次の膝まぐらで眠っていたそうだ。

F i n .

ひなたぼっこ

「へーいじい…」

「なんやあ…」

「めっちゃ気持ちいい…」

「…せやな」

「お日様あったかい」

「眠たなってくるな」

「だめ。寝んという」

隣におる和葉から、寝るな宣言だされてしもた。

こんな風にふたりで縁側で寝転がってひなたぼっこできるのは、幼馴染の特権だと思うねん。この居心地のいい関係、恨むこともようけあるけど。今は素直に感謝したい気分や。

自分のすぐ隣で、気持ちよさげにごろごろしとる和葉は、めっちゃ可愛ええ。

幼馴染って関係やなかったら、絶対抱きしめとったな…

ドッソ

「…何すんねん」

和葉が、転がってぶつかってきおった。

「寝んといて言うたやん」

「寝てへんわ」

「うとうとしてたやん！」

「うっさいわ！」

デッソ！

「いったあゝ！なにすんの！？」

「仕返しやボーケ」

「もお！…！！」

ゴッソ！

「仕返し仕返しや！」

「やりおったなあゝ？」

倍返ししたる思つて、ちょい助走をつけてみた。

どすん！

「…え？」

「…ふえ？」

転がったら、いきなし目の前に和葉の顔がアップで映った。

しもた。勢いつけすぎて和葉の上に乗り上げてしもたんやな。つか…この体制やバいんちゃう？まるで俺が和葉押し倒したみたいな…

「「……………」」

あかん。視線はずされへん。お互い見合つたまま。

しっかし、長い睫毛やな…。ん？睫毛にゴミついとるやん。

「…和葉、睫毛にゴミついとるで」

「え！？」

「動くな。とつたるから、目エつぶつとけ」

「うん」

…おいおい。この状況でよく目エつぶれるな！
誘ってるんか？

…なわけないわな。

けど、キスしたいわ。

こんな美味しいチャンス、二度とないんちゃう？

いや、まてまて。ここでうっかりキスして、和葉と絶交されでもしたら…

…やっぱ安全をとろう。

俺のこの鉄の理性、誰かほめてくれや…。

でも、悪戯くらいは…。

がぶ。

「ひゃあ!？」

「…仕返しや」

「なっ…なっ…」

和葉は真っ赤ななって口パクパクしとる。
まあ当然やな。

鼻の頭、甘噛みしたったんやから♪

悪戯したる思った時目に入ったんが、白くて形のいい、和葉の鼻。
あんま無防備しとると、喰うたるで？っちゅう警告もかねて、がぶ
つとやったった。

「いつ…いつぺん死に！」

真っ赤な和葉、可愛ええわあ…。

いつとくけど、妥協するん今回だけやからな？
今度煽りおったら…

な？（笑）

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2385i/>

平和のコバナシたち

2010年10月10日17時06分発行